「さあ、パンクでロックなシナリオで行くぜ！」（作品名）

名前（笈川　敏昭）

あらすじ1

鈴木太郎６０歳は家族と会社のために、真面目にコツコツと働き続け、３８年の会社員人生を定年で終える事が出来た。鈴木には、定年後はシナリオライターになって、自分の書いたシナリオをテレビや映画にしたいという夢があった。生活は厳しくなるが家族の了解を経て、定年の翌日からシナリオライターの卵として活動をスタートする。とはいっても日常に大きな変化はなく、毎日自宅で創作活動をしてシナリオ公募をする。週に1回シナリオスクールに通って課題を発表して受講生と講師から講評を聞いて修正していく、などの単調な毎日だった。そして唯一の楽しみと言えば、シナリオ仲間との作品の講評会だったり、前の会社のメンバーと飲んだりすることだった。そんな日々を過ごす中で、元会社メンバーや子供達からの批判、シナリオ仲間からの作品に対しての辛口批評などを聞かされていくと、覚悟は決めたつもりだったが自信を無くしていき、このままシナリオ書いていて良いのかと悩んでいく。その中で唯一の理解者である妻の景子から「何を怖がっているの。失うものなんてもうないでしょう。６０歳過ぎて才能があるとか、無いとか関係ないじゃない。周りの人達が言っている事なんか気にしないで、腹くくってしっかり書きなさい」等と言われて、もう1度シナリオと向き合って行く決意をする。その結果、無事にコンクールへの応募が出来て久しぶりにスクールに行くが、鈴木以外のシナリオライターを目指す受講生は皆それぞれの道を歩き始めていた。スクールを卒業してプロとして生きて行く人達、夢を諦めて帰省や就職をする人達、引き続き残ってシナリオライターを目指す人達を見ながら、鈴木も自分の置かれている現実を受け止めながらそれでも前に進んで行く決意をする。そして少しもパンクでロックでない鈴木の日常は、これからも続いていく。

人物の名前（年齢）

鈴木太郎（６０）自称シナリオライター
鈴木景子（５５）鈴木の妻
鈴木英治（２８）鈴木の息子
鈴木杏里（２５）鈴木の娘
渡辺純一（４５）前の会社の上司で係長
山田佑太（４０）前の会社の後輩
横川卓也（５０）前の会社の後輩
佐藤千尋（４５）前の会社の部下でパート事務
工藤幸助（５５）前の会社の課長
高橋香織（６５）スクールの講師
宮沢和代（４０）鈴木のシナリオ仲間
大友久志（２０）鈴木のシナリオ仲間
内田克也（５０）鈴木のシナリオ仲間
北村佳祐（３５）プロデューサー
川口優花（２５）受講生でコンクール入賞者
室井桃子（３５）受講生でコンクール入賞者

１○　オフィス街の高層ビル群・全景（夕）

Ｔ・２０２３年７月

行き来する人達が早足に歩いている。

２○　高層ビル・事務所内（夕）

３０人程の人達が集まっているその中心に

鈴木太郎（６０）が花束を持って立っている。

工藤幸助（５５）、佐藤千尋（４５）、渡辺純一

（４５）、山田佑太（４０）、横川卓也（５０）、

と周りの社員達が拍手をしている。

工藤「えー、長年勤務していた鈴木さんですが、本日で定年退職となります。まだまだ継続して頑張って頂きたかったのですが、ご本人の希望で退職のはこびになりました。それでは鈴木さんから退職のご挨拶を頂きたいと思いますのでよろしくお願いいたします」

工藤が鈴木に合図をすると、鈴木が一歩前に出て、

鈴木「皆様、３８年間、大変お世話になりました。本日まで無事定年まで勤めることができましたのも皆様のおかげです。最後になりますが、皆様の健康と益々のご活躍、そして会社のさらなる発展を心よりお祈りし、退職の挨拶といたします。皆様、長い間、本当にありがとうございました」

皆が拍手をしている。鈴木がお辞儀をしている。

渡辺、千尋、山田、横川が鈴木を見ている。

３○　高層ビル・エントランス内（夕）

鈴木が１人、早歩きでエントランスを通過して、

ビルを出たところで花束を空に高く投げる。

鈴木の声「終わった、遂に定年だ、この日を待ちわびていたぞ！

今から僕は、全てのしがらみを捨てて生まれ変わるのだ！」

４○　鈴木家・全景（夜）

住宅街、鈴木が家に向かって歩いている。

５○　同・リビング内（夜）

鈴木景子（５５）、鈴木英治（２８）、鈴木杏里（２５）が豪勢な料理がある食卓に座っている。

玄関の扉の開閉音。靴を脱ぐ音。

景子「お父さん帰って来たかしら」

リビングの扉が開いて鈴木が入って来る。

景子・英治・杏里「おかえりなさい」

鈴木「ただいま、待っていてくれたんだ。ありがとう」

景子「長い間お勤めご苦労様でした。さあ座って下さい。みんなで食べましょう！」

英治「お腹減ったよ。でも凄いご馳走だな。親父、母さんに感謝しないとだめだよ。今日1日かけて作っていたんだから」

鈴木「母さん、ありがとう。本当に美味しそうだね」

杏里「お父さん、で、私達に話ってなによ？」

鈴木が笑みを浮かべて、

鈴木「とりあえず、ご飯をみんなで食べようよ」

杏里「そうだね。別に急がないものね」

みんなで料理を食べている。

×　×　×

食卓の食事が半分程無くなっている。

英治「ああ、食ったな。やっぱ母さんの料理はおいしいよね」

景子「ありがとう」

杏里が鈴木の顔を見ながら、

杏里「お父さん、明日から仕事しないでどうするつもりなの？」
英治「そうだよ、今どき６０歳なんて普通に元気なんだからそのまま働けば良かったのに。もしかして、実は会社にいられない事したんじゃないの？」
鈴木「バカな事言わないでくれよ」
英治「えっ、てことは、もしかして俺達の金を当てにしている？」
杏里「そうよね、家にそんなお金の余裕があるとは思えないから、月にいくらか入れろっていう話？」
鈴木「ちがうよ、そんな事考えていないよ。でもお前達がどうしても家にお金を入れたいなら受け取るけど」
英治「いやいや、俺達まだ社会人で最下層だから、給与なんか親父と比べて全然低いし、自分の事だけで精いっぱいだよ」
杏里「あたしもだからね」
景子「あなた達、いい加減にしなさいよ」
英治と杏里が顔を合わす。鈴木が３人を見る。
鈴木「お前達には迷惑をかけないから安心してくれ。有給と失業保険で１年近くは凌げるから大丈夫だよ」
英治「でも年金もらえるまであと５年もあるだろ？」
鈴木「その後はアルバイトで仕事を見つけて頑張って働くよ」
杏里「だったらそのまま会社に残ればよかったじゃない？」
景子が鈴木を見ている。
鈴木「いや、僕なりに考えて出した結論なんだけど、元気に仕事できる年齢を一応７０歳から７５歳までに設定するとだよ。あと残り１０年から１５年じゃないか。お前達ももう独立したし、お母さんと２人だったらバイトしながらで何とか生活ができると考えたんだ。だったらもう後先気にしないでやりたい事をやって生きて行こうと思ったんだ」
杏里「で、なにするのよ、その年で」

英治「そうだよ、その年でさ」
鈴木が立ち上がり、杏里と英治に向かって、
鈴木「シナリオライターになって映画とか、テレビドラマのシナリオを書くんだ！」
英治「な、なに寝ぼけた事言っているんだよ！　その年になって無理に決まっているだろう！」
杏里「私はてっきり人生の楽園的にカフェでもやるのかと思った」
英治「そうだよ、まだその方が現実的じゃない、そっちの方が良いよ。そしたら俺達も人生の楽園出られるじゃん！」
杏里「英治、何かそれ話がそれている」
英治「あ、ごめん」
鈴木が椅子に座りながら、
鈴木「ともかく、そういう事だからよろしく頼むよ。やっぱり家族に反対されてまでやるのは気が引けるからさ」
杏里「お母さんはどうなのよ」
景子「私はお父さんがそうしたいならそれでいいけど」
杏里「お母さんがそう言うなら良いけど……」
英治「親父１つ聞くけどさ、シナリオライターってそんな簡単になれるの？」
鈴木「なれるわけないだろう」
杏里「何かあてとかあるの？」
鈴木「何にもないよ。だから２年前から週１回シナリオスクールに通っているんだよ」
英治「行けばなれるんだ」
鈴木「そんな訳ないだろう。まずは基本を学んでだな、それからは日々シナリオを創作するだけだよ」
杏里「お父さんがシナリオを作っているの？」
鈴木「そうだよ、僕が作らないと始まらないだろう。それを今ス

クールで発表しているんだよ」
英治「そんな事して恥ずかしくないの？」
鈴木「恥ずかしいよ。お尻の穴がむずむずするよ」
英治「評判は良いの？」
鈴木「いや、全然いつもボロカスに駄目だしされている」
杏里「じゃ、駄目じゃない。才能無いじゃないの」
景子「英治、お父さんに失礼よ！」
杏里「だって、６０歳過ぎて何か勘違いして痛いじゃない」
鈴木「そうだよ。６０歳になって新しい事を始めるってそういう事だよ。でも自分で決めた事だから、これから習熟を重ねて何とかしていくつもりだよ」
英治「無謀だよ、無謀過ぎだよ！　目覚ませよ！　時間の無駄だからもっと何か効率が良い事とか、お金になる事を考えろよ。そうだろ、親父まだまだこれから人生長いんだぞ。そんな夢見たいな事言って人生棒に振るなよ」
鈴木「そのセリフは親が子供に言うセリフで、まさか自分の子供から言われるとは思わなかったよ」
英治「茶化すなよ」
景子「英治良いじゃない。お父さんがそこまで言うんだからしばらく見守りましょうよ」
英治と杏里が顔を見合わせて、
杏里「まあ、お母さんがそう言うならそれでいいけど」
鈴木が立ち上がり、みんなを見ながら、
鈴木「みんなありがとうございます。それでは私こと、鈴木太郎は、本日より第２の人生をシナリオライターの卵としてスタートをして、当面の目標をコンクールに入賞をする事とします。以上、よろしくお願いします！」
鈴木が３人に向かってお辞儀をする。

景子が拍手をする。
それを見て英治、杏里も不満げに拍手をする。
鈴木が笑みを浮かべる。

6○　ＰＣ画面（夜）
タイトル「さあ、パンクでロックなシナリオで行くぜ！」第１稿
脚本　鈴木・パンク・太郎

7○　鈴木家・書斎内（夜）
鈴木がヘッドフォンをしてＰＣに打ち込んでいる。
壁には目指せ『Ｎテレシナリオライターコンテスト』と書いてある。

8○　鈴木家・リビング内（朝）
窓から日差しが入る。庭にヒマワリが咲いている。
景子、英治、杏里が食卓で朝食を食べている。
鈴木がパンクファッションで、手を上げて入って来ると、景子、英治、杏里が驚いて鈴木を見る。
英治「な、なんだよその格好は？」
杏里「昨日の今日で頭おかしくなったんじゃないの？」
景子「お父さん、どこでそんな服を……」
鈴木「おはよう！　お父さんは今日から鈴木パンク太郎に生まれ変わったぞ。お母さん、朝ごはんをお願いします」
景子「お母さんって……、お父さんからシナリオライターになるって聞かされましたけど、その格好はシナリオライターという職業と関係ないと思いますが」
鈴木「お母さん、君は何も分かっていないね。物語を作るために

は頭の中で考えるだけではダメなんだよ。だから一旦、昨日までのお父さんは死んだんだ。これからの僕は物語を作るためだけに生きるんだ。だからお母さんには、そんな僕の生き方を分かって欲しいんだよ。それではパン２枚、バターマシマシのジャム有、アンド、ホットコーヒーをお願いします」

英治「親父、昨日シナリオ書くのはしぶしぶ了解したけど、普通に書こうよ。ね、俺達はしぶしぶだけど賛成しているんだから。それでいいじゃない、創作に外見は関係ないでしょう」

杏里「そうよ仕事から解放されて色々と弾けたい気持ちは分かるけど、早く着替えて今日１日をやり直そう、ね、わかったら早くその訳の分からない服着替えて来て、お願いだから！」

鈴木がゆっくり椅子に座ってみんなを見る。

鈴木「みんな誤解をしているよ。僕は全ての固定概念を取り払って物語を作りたいんだけなんだよ。学生時代から今まで、沢山見た映画やテレビの記憶を手繰り寄せながら、今と融合させて１行１行を書いていきたいんだ。でもそのためには普通じゃダメなんだよ。お父さんは定年までサラリーマンが出来た凡人だからすごくわかるんだ。仕事で色々な人達の気持ちに寄り添っていく事って、自分の考えをゼロにしてその人達の気持ちや思いを１つ、２つ、３つって、心の中に入れていく事なんだ。そうするとね、どんどん人の想いが入って来て、自分が誰か分からない何かになっちゃうんだよ」

３人が鈴木を見ている。

鈴木「だから、まずは自分の外見を変えて鎧を作りたかったんだ。これからはこのパンクファッションを纏っていくからみんなは暖かく見守ってほしんだよ。わかってくれないかな」

景子、立ち上がりパンを焼き始める。

英治と杏里が苦笑いを浮かべて食事を食べ始める。

鈴木が嬉しそうにみんなを見ている。

９○　同・書斎内（夜）

鈴木がブツブツ言いながらＰＣに打ち込んでいる。
扉入口の棚におにぎりが置いてある。

１０○　同・リビング内（夜）

景子と英治と杏里が食卓で食事をしながら、

英治「でも親父には本当にびっくりだよな」

杏里「本当よ、昨日までは家族思いのやさしい父親で尊敬していたのに、昨日のステップ１を経て、今日はステップ２でパンクファッションでしょう、びっくりするわよ。人間って振り切れるとああなるのね。まだ３、４ステップきっとあるわよ。お母さんこれからどうするのよ？　あの話っぷりだと外もあの格好で歩くよ」

英治「そうだよ、定年退職後にする事無くて、ぼーっとされても困るけど、この状況も困るでしょう？」

景子「そうよね。お父さんの中にまだあんな情熱があったなんて本当に気が付かなかったわ。今まで本当に我慢して私達を養ってくれたんだなって思うと、すごく感謝したい気持ちだけど、でもアレはないわよね」

杏里「いつまでアレで行くつもりなのかしら？」

英治「結局才能がないことに気付いて、正気に戻るとは思うけど」

景子「お父さんの取柄は真面目にコツコツよ。結構しぶとく行くと思うのよね。私は外見さえ直してくれれば良いんだけどね」

杏里「確かにそうよね、外見戻れば地味にパソコンやっているだけだもんね」

英治「仕方がないからしばらく様子を見て行こうよ。今のところ

問題は外見だけだし」
杏里「とりあえず経過観察期間中という事にしょうか。でも私達は仕事で昼間はいないから、お母さんよろしく頼むわね」
景子「わかったわ。世間の皆様には迷惑をかけない様、しっかり見守っていくわ」

１１○　鈴木家・リビング内（朝）

景子がソファでカタログ雑誌を見ている。
鈴木がパンクな服装で鞄を持って入って来る。
鈴木「お母さん、シナリオスクールに行ってくるね！」
景子「その格好で行くんですか？」
鈴木「そうだよ、似合っているでしょう」
景子「昨日のお話しで気持ちは十分に理解しましたけど、外に出る時は普通の恰好をするのは難しいですかね？」
鈴木「うん、無理だね。多分この問題は時間と慣れで解決すると思うよ。じゃ行ってくるね」
景子「行ってらっしゃい……」

１２○　繁華街・国道沿いの道

鈴木が辺りを見渡しながら歩いている。
ファッショナブルな人達が大勢歩いている。

１３○　シナリオスクール・入口・全景

様々な年代の受講生達が建物に入って行く。

１４○　同・教室内

主婦、学生、フリーター、中年の男女が総勢２０名程席についている。

鈴木も席についている。
高橋香織（６５）が教壇で資料を見ている。
宮沢和代（４０）、大友久志（２０）内田克也（５０）が鈴木の前後の席に座っている。
和代「鈴木さん、そのいかした恰好どうしたの？」
鈴木「２年間の見習い期間が終わったんだよ。これから僕は、本気でプロのシナリオライターの卵として取り組んで行くんだ」
大友「鈴木さん、今日はいつになく熱いじゃないですか」
内田「確か先月で会社定年退職したんですよね？」
鈴木「そう、今までは仮面ライターで仕事を言い訳に本気で取り組めなかったからね。そのカセが取れたからガンガン書いてコンクールに応募するんだ」
内田「でも鈴木さん、シナリオってカセが重要だよ。カセがない物語は葛藤がないよ」
和代「確かにそうよね。みんな時間の無い中で一生懸命調整して書いているものね」
鈴木「ご忠告ありがとう。僕も自分のカセを考えてみるよ」
香織が受講生を見渡して、
香織「それでは、時間になりましたので始めて行きますね。今日は前回の課題『家族』で1時間物のプロットとそのシナリオ１０分程をお願いしましたが、発表できる人はいますか」
鈴木と他に５人が手を上げる。
香織「それでは今日は何故か派手な服装の鈴木さんから行きましょうか。鈴木さんいいですか？」
鈴木「はい、お願いします」
鈴木がＰＣ画面を見ながらシナリオを読んでいる。
教壇後ろのモニターに鈴木のシナリオが映し出されて、原稿を読み始める。

みんなつまらなそうに聞いている。
鈴木が笑みを浮かべて、
鈴木「『圭一が空を見上げて歩き出す』以上で終わりです」
香織が難しい表情。受講生達ため息をついている。
香織「それではみなさん感想をお願いします」
川口優花（２５）が喋り出す。
優花「申し上げづらいのですが、どうしたらこんなに退屈な話が書けるのか不思議です。物語の起伏は無く平坦だし、主人公の心情も全く共感が出来ません。鈴木さんなりに頑張っているのに、きつい意見になってしまいすいません。以上です」
鈴木が呆然としている。
室井桃子（３５）が話し出す。
桃子「そうですね。今の優花さんが言った感想と同じなのですが、セリフ回しで面白いところもあるのですが、どこかで聞いたセリフで新しさがないというか、何かもう１度基礎から勉強をされた方が良いかと思います」
鈴木がうつむいている。香織がみんなを見て、
香織「あっ、多分皆さんの感想それほど変わらないと思いますので、私がまとめさせてもらいますね。鈴木さん発表ありがとうございました。気を悪くしないで聞いてくださいね。あくまでも次に良い物を書いてもらうための助言ですからね。皆さんが指摘されていたとおり、ストーリーに起伏がなく伏線だけが提示されていますが、広げ過ぎて回収ができていない。それで致命的なのは主人公に共感が出来ないことです、今回の内容ではコンクールは難しいですね。もう１度テーマを絞り込んで主人公のキャラを変えて作り直した方が良いと思いますよ。まだまだ改定次第ではよくなりますから頑張って修正をしてください。それでは次の方行きましょうか？」

和代、大友、内田が気まずそうに目配せしている。
鈴木が天井を見ている。

１５○　喫茶店・店内（夕）

鈴木、和代、大友、内田が座っている。

和代「私は今日の鈴木さんのシナリオ面白かったけどな」

内田「あの２人、コンクールで入賞したからってエラそうに言い過ぎだよ。鈴木さんに失礼だよ」

大友「でも言っていた事は間違っていないと思いますよ。鈴木さん、新しい話を考えた方が良いんじゃないですか？」

鈴木「うん、みんなありがとう。そうだよね、考えてみたら今までも同じような事言われていたし、まだまだだよね。まずは来月のＮテレのシナリオライターコンテストを目指して、仕切り直して頑張るよ！」

内田「鈴木さんと同じで、俺達もそのコンテスト目指しているから作品のチェックをみんなでしていこうよ！」

和代「そうよ、目指せ１次通過よ！」

大友「それって普通入賞じゃないですか？」

内田「そうだよ志が低すぎるよ」

和代「だけど、みんな今まで１次も通過した事ないじゃない」

大友「僕は今回初めて応募ですよ」

鈴木「みんな、僕達は書くしかないから頑張って書こうよ！」

みんな、小さいガッツポーズで、

全員「そうだね。頑張るぞ！　（小さい声で）おう！」

１６○　鈴木家・書斎内（夜）

鈴木がヘッドフォンをしてＰＣ画面を見ている。

１７〇　居酒屋・店内（夕）

渡辺、山田、横川、千尋が座っている。

鈴木が店員に席を案内されてやって来る。

みんな鈴木の服装に驚いている。

渡辺「鈴木さんその格好どうしたんですか？」

千尋「でも、わりと似合っていますよ」

横川「いやいや、それはないでしょう佐藤さん」

山田「まあ座ってくださいよ。とりあえず生５つお願いします！」

鈴木がおしぼりで顔を拭いている。

鈴木「いや、みんな久しぶりだね」

渡辺「久しぶりって、まだ1か月経っていないよ」

鈴木「あっ、そうか。あははっ」

みんなでジョッキーを持って乾杯をする。

全員「乾杯！」

各々がビールを飲んだり、つまみを食べている。

千尋「鈴木さん、さぞや優雅な時間を過ごしているんでしょう！」

横川「本当うらやましいよ、今どき６０歳で仕事辞められるなんてすごいよ。普通は働くでしょう。俺なんか絶対に６０歳でやめられないよ」

山田「なんにもしないとボケちゃいますよ」

渡辺「実際どう過ごしているんですか？　興味あるな」

全員が、黙々と食べて飲んでいる鈴木を見ている。

鈴木「うん、実は今シナリオを書いているんだ」

全員「えーっ」

全員で驚いている。

千尋「シナリオって、あのテレビとか映画のですか？」

鈴木「うん、そうだよ」

渡辺「それってどういう事なの？　説明責任あるでしょう！」

鈴木「そんな話、みんな聞きたいの？」

全員が、鈴木を見て大きく頷いている。

鈴木「それじゃ話すけど、自分的には仕事は好きだったし、定年まで働けたことに満足はしているんだ。で、６５歳まで働こうとも思ったけど、そこから新しい事を始めるのはちょっと遅いかなって思ったんだ」

みんな鈴木を見ている。

鈴木「自分は高校時代から、お笑い、映画、小説、漫画、お芝居が好きで見ていて、ずっと何か物語を作りたいって思っていたんだ。でも、ただ漠然とだったから、大学を卒業して普通に就職をしたんだけどさ」

横川「普通そうだよ、そんなサブカル的な趣味ってみんなあるし」

鈴木「でも、ずっと何か残っていてさ、なら思い切って定年後はシナリオライター目指そうって思って、５８歳の時にシナリオスクールに申し込んだの」

全員が鈴木を見ている。

千尋「なにそれ、す、すごいじゃないですか？」

山田「まじですか、毎日仕事しながらそんな事考えていたんですか？　それってちゃんと仕事していました？」

鈴木「山田君、僕、ちゃんと仕事はしていたじゃないか？」

山田「そうですけど、結果は出ていなかったと思いますが」

鈴木「た、確かにそうかもしれませんが、山田君感じ悪いですね」

山田「いやいや、でも腑に落ちませんよ」

横川「真面目だけど、結果が出ない鈴木さんが思い切った事しましたね」

鈴木「その言い方もトゲがありますね。でもまだコンクールに応募しても全然結果は出ていませんし、はたから見たら何もしていない派手な服装の怪しいおじさんですけどね」

千尋「でも、ほ、本気なんでしょ？」
鈴木「もちろんだよ、この年で恥ずかしいけど、本気も本気だよ」
山田「それじゃ、今は毎日シナリオを書いているんですか？」
鈴木「そうだよ。でもすごく地味な毎日だよ。家族以外とほとんど話をしないで、本読んで、映画見て、シナリオ書いて、アイデア考えて、週１回スクール行って、定期的にコンクールに応募しているんだけなんだ。だからたまにこうやって集まる場があるのはすごく嬉しいです」
渡辺がテーブルを叩いて、
渡辺「いや、ダメダメ、そんなの認められないよ。６０歳過ぎて夢を追うなんて酷いよ。俺達サラリーマンは夢と希望を捨ててだよ、毎日家族のために働かなくちゃいけないんだよ。ローンだってあるし、老後を考えたらそんな浮かれた事なんかできないよ。俺だって鈴木さんみたいに生きてみたいよ。でも俺はきっと６５歳まで働いて、その後も警備員か掃除の仕事をする事になるんだよ、きっと。超現実路線で生きて行くしかない俺からしたら鈴木さんの生き方は認めらないです！」
横川「まあまあ、渡辺さん落ち着てくださいよ。お気持ちは分からないでもないですが、人それぞれですよ。ねぇ、佐藤さん」
千尋「そうですよ。みんなで応援をしてあげましょうよ」
山田「まあ、鈴木さんだってまだシナリオライターを目指しているだけですし、応募しても落選ばかりなんだから、そのことをネタに毎回飲みましょうよ。で、入賞したらその時はそのお金でご馳走してもらいましょうよ。ね！」
鈴木「山田君酷いよ、それだと僕にうま味が何も無いじゃない」
渡辺「いや、俺はまだ納得してないぞ。俺の部下だったくせに酷いじゃないか。本当は俺の事ずっと馬鹿にしていたんだろ。お前ってそういう奴だよ。がっかりだよ。ちくしょう。夢な

んか見やがって！　夢は寝て見るだけにしてくれよ」
横川「渡辺係長、珍しいですね、そこまで絡むの。いつもは鈴木さんを工藤課長から守っていたじゃないですか？」
渡辺「守っていたよ。けどさ、、サラリーマンは夢を持っちゃ駄目なのに、現実だけを見ていればいいのに、鈴木さんはちゃっかり夢を持っていたんだよ。こんな裏切りあるかよ？」
渡辺が鈴木に絡もうとすると横川が止める。
横川「渡辺さん、一旦落ち着いてくださいね、ね。」
山田「すいません、生５つ追加でおねがいします！」

１８○　繁華街（夜）

渡辺、山田、横川、千尋、鈴木が酔って大声を出して歩いている。
往来の人々が振り向いてみている。
渡辺「鈴木の裏切者！　俺は夢と希望なんか持たないぞ！　持つものか！　でもどうして工藤は異動しないんだ！」
山田「僕は株で億り人になって会社辞めまーす！」
横川「俺も６５歳まで働いて、それからも働いて家族を養うぞ！
渡辺係長、いいから早く昇進して俺を係長にしてくれ！」
千尋「渡辺係長！　早く偉くなって私を正社員にしろ！　出来ないならすぐ時給あげろ！」
鈴木が笑みを浮かべて皆を見ている。
みんな騒ぎながら歩いて行く。

１９○　鈴木家・書斎内（夜）

鈴木がヘッドフォンをしてＰＣに打ち込んでいる。

２０○　喫茶店・店内（夕）

和代、大友、内田、鈴木が座っている。
和代「Nテレの締め切りまであと1か月切ったわよ。みんな進捗はどうなの？」
大友「そういう和代さんは？」
和代「そういう大友君は？」
内田「やめなさいよ、その無駄な会話」
和代「で、そういう内田さんは？」
鈴木以外、みんな爆笑する。
和代「あれ、鈴木さん気悪くした？」
鈴木「いや、僕もやる気は一杯あるけど、全然進まないんだよ。まだプロットもまとまっていないんだよね」
内田「それ言ったら俺もそうだよ。俺もまだ話の内容自体がまとまっていないし、散らかったままだよ」
鈴木「ちなみにどんな話ですか？」
内田「えっ、みんな聞きたいですか？　みんな聞いてくれるの？」
全員「うん、聞きたい」
みんな内田を見る。内田がノートＰＣを見ながら、
内田「まだまだ固まっていないけど。設定は小学校が舞台の女の先生のバディもので、天然の新人教師が担任、性格の悪い中堅教師が副担任なの。で、本当は自分が担任をしたかったけど、教頭から新人を1人前の教師にすれば次は担任を持たせると言われて、渋々そのミッションを受けるんだけど、性格が悪いからちょこちょこ意地悪する訳なの。でも新人教師は天然だから全部を前向きにとらえていくんだ。あまりに響かないから授業参観で大きな地雷を仕掛けるんだけど結局自分がその地雷を踏んで新人教師に助けられてお互いを認め合っていくって話で、その間に、イケメン教師の登場や、生徒達のいたいけなエピソードを何個か入れて６０分物にしようと

思っているんだけど。ど、どうかな？」
和代「ばたばたコメディだよね。それなりに面白いじゃない」
内田「でも、それなりなんだ……」
大友「僕は内田さんにしては、設定は面白いと思いますよ」
内田「内田さんにしてはって、どういうことだよ」
和代「まあまあ、大友君言い方気を付けてよね」
大友「すいません」
内田、大友を怒った表情で見ている。
鈴木「内田さん僕は面白かったな、ぜひ書き上げてくださいね」
内田「鈴木さんありがとう。頑張って書き上げたいんだけど、今本当に仕事が忙しくてさ、毎日残業で時間がないんだよね」
和代「私だってパート、家事やりながら書いているんだから頑張ろうよ。ねぇ、私もあるんだけど聞いてくれる？」
鈴木「もちろんですよ」
内田、大友もうなづく。
和代、鞄の中からノートＰＣを出す。
和代「私はドロドロのホラーものなの。とある田舎に伝わる民話をもとにした話で、室町時代、ある貧しい村の女の子が村人から虐められ、親も生きるためにその子を売ろうとするけど、その子は全てが嫌になって村人も近寄らない鴉の森に逃げ込むの。すると森の主の鴉男に会って、魂を売る代わりに村を焼き尽くしてもらうと、村人全員焼け死ぬんだけど、女の子に優しくした男の子だけ生かされて、２人で生きて行くって話なの。その村の場所は村人が死んだ数の鴉町６６６番地と言われて現在までその町で語り継がれているの。それで本題の話は、女子高生が主人公だけど、この子も家が貧しくて、皆から虐められていて、それでも彼氏ができるんだけど、結局騙されていて、捨てられた日に猟奇殺人犯に捆まり殺され

てしまうの。その何人も殺した殺人現場が山奥の廃屋の家で鴉町６６６番地なの。それでその殺された女子高生に鴉が乗り移り、その子が復活をして自分を苦しめた人達に復讐をしていくって話なの。でも女子高生が好きだった男の子の事が忘れられずに、最後にその男の子の奥さんに乗り移って一緒に暮らしていくっていう話なんだけど、どうかな？」

３人が固まって和代を見ている。

内田「本当、ドロドロですね。でも何か見たくなりますね」

大友「映像にしたら面白いんじゃない？　鴉男どんな姿にするか興味あるな。あとは民話との絡ませ方で話が変わるよね」

鈴木「和代さん、そんな優しい顔してすごい世界観ですね。救いが無さすぎて救われました。いや、すごいな……」

鈴木「大友君のシナリオはないの？」

大友「ありますけど、この後はやりづらいな」

和代「聞かせてよ」

大友「それではいいですか？」

鈴木、内田、和代がうなづく。

大友がタブレットを出して読み始める。

大友「僕は近未来物です。西暦２５２３年、地球に巨大隕石が激突した事により、有害物質、異常気象等が発生し、地球は人類が住める環境が無くなり滅びていきます。しかし指導者と研究者は人類滅亡を受け入れる事が出来ず、地球外生命体が地球に来て人類復活の方法を見つけてくれると期待し人類の脳の記録や遺伝子と優秀な人間を冷凍にして残します。そして人類滅亡後も４体のアンドロイドが人類の期待を背負い、宇宙に向けて信号を発信し続けるんですが、アンドロイドの寿命を想定した日までに訪れる事は無かったんです。さらに３００年が経過したところで、地球外生命体が降りて来て施

設に入り、冷凍した人間を甦らそうとするのですが時間が立ち過ぎていて既に腐っていたんです。それで仕方なく人類の脳の記憶を再生していくんです。そこから人類の懐かしい記憶が再生されてその映像を見ていく中で、自分達は滅びた生命体を代表して、各惑星を回っているアンドロイドだと言う事に気づくんです。しかし既に帰る惑星は無いのでどうする事も、どこに行く事も出来ないので、ただ人類の記憶の映像を電池が切れるまで見続けていくと言う、救いのない話です」

3人呆然として大友を見ている。

鈴木「何かシュールな近未来物でいいですね」

和代「何か切ない感じもいいわ。誰も居ない処で待っている感じが切なくていいし、でも人類の記憶の物語が肝になるわね」

大友「そうなんですよ、その話をどうするかで決まるんですよ」

内田「実写映像もいいけど、日本だと予算でアニメかな」

鈴木「みんな、学校や仕事や家事しながら作っていてすごいです。それに比べて自分はエラそうにシナリオライターになるなんて言いながら皆さんの足元にも及びません。もう1度シナリオを作り直してきますので、来週の講座の後に時間ください。すいませんが、今日のところはこれで失礼いたします」

鈴木が立ち上がり店から出て行く。

3人が鈴木の後姿を見ている。

内田「鈴木さんって、真面目だよね」

和子「大丈夫かしら思い詰めちゃって」

大友「ある意味、仕事辞めて逃げ場ないんですかね。応援してあげたいけど、作る話も何か古いし、少し難しいですよね」

和代「まあ、そうは言っても、あれだけ頑張っているんだから、来週話聞いてあげましょうよ」

大友「そうですね。期待薄ですけど」

内田「大友君きついよね」
和代「でも私達も人の事どうこう言ってられないわよ」
内田「では、時間も時間だし、私達も行きますか」
３人黙って席を立ち、店を出て行く。

２１○　鈴木家・リビング内（夜）

景子がソファに座り、テレビを見ている。
鈴木が扉を開けて入って来る。
鈴木「ただいま」
景子、振り返らずテレビを見ながら、
景子「おかえりなさい」
鈴木も横に座り、しばらくの間ドラマを見ている。
鈴木「これ、なんか面白いね」
景子「お父さん、シナリオライター目指していてこれ見てないの」
鈴木「映画はよく見ていたけど、テレビドラマまで見る時間は無かったし」
景子「これ「すいか」っていうの。名作よ」
鈴木「そうなんだ。お母さんは昔からドラマよく見ているよね」
景子「私は映画よりテレビドラマが好きよ。いまなんか動画配信サービスで何でも見られるから昼間からドラマ三昧よ」
鈴木「お母さん、僕のシナリオ見てくれないかな？　ドラマを沢山見ているお母さんの意見が聞きたいんだ」
景子がテレビ画面を見ながら、
景子「そんなの嫌よ、お父さんは好きで書いているんだらまずは自分で頑張ってくださいよ」
鈴木「そんな事言わないで、今月公募で送るシナリオが中々進まなくて困っているんだよ」
景子「何甘えた事言っているのかしら。この前自分の全部を注ぎ

込んで書くって言っていましたよね。まずは自分で向き合ってからですよ。このタイミングで私に頼むのは違うと思いますよ。すいませんが、今、良いところだから一緒に黙ってみるか、シナリオを書くかどっちかにしてください」

鈴木が立ち上がり、扉を開けて出て行く。

景子が一瞬振り向くが、テレビ画面を見ながら、

景子「(小さい声) 頑張ってください、パンク鈴木なんでしょう。とにかく書くのよ」

２２○　同・書斎内（夜）

鈴木がＰＣ画面に入力をしている。

２３○　喫茶店・店内

和代、大友、内田、疲れた顔の鈴木が座っている。

和代「鈴木さん今日は出来ているの？」

鈴木「うん、何とかあらすじを作って来た」

内田「流石ですね。締め切り間に合いましたね」

大友「あとは出来上がり内容ですね」

鈴木「それじゃ、あらすじを聞いてもらっていいですか？」

和代、大友、内田がうなづく。

鈴木がノートＰＣを取り出して、

鈴木「僕もバディ物ですが刑事物です。主人公は中年の男です。都内では敏腕の刑事でしたが、ある不祥事で左遷されて地元の警察署に異動してやる気をなくしていますが、一緒にバディを組む新人と地元の小さい事件を解決していくうちに事件に大小はない事に気がついて行く話です。最初の事件は農園でサクランボが盗まれますが、そこは友人が運営している農園で、その奥さんが初恋相手のため捜査をやる気になります。

今回の犯人は同じ農園で働く叔母ですが、生活も苦しく給与が安い事に不満を持っていて、魔が差してサクランボを5万円分盗んでします。もともと優秀な刑事なので犯人はすぐに分かるのですが、友人夫婦に叔母の不遇を気が付かせ事件を無かった事にします。ゆるく明るく事件を解決して行く話ですがどうでしょうか？」

和代、内田、大友が顔を見合わせている。

和代「鈴木さん、この前よりわかりやすくなっているんじゃない。設定を地方で人が死なない事件にしたのも良いよ」

内田「そうだね。ほのぼのした感じで良いと思いますよ。ただ、題材が地味なところが少し気になりますね」

大友「以前よりは面白いけど、コンクールにはパンチ不足ですね。でも時間も無いし、これで進めるで良いんじゃないですか」

鈴木がうつむいてノートＰＣをしまう。

和代「鈴木さん元気出してよ。確実に上手くなっているよ。ドラマの企画なんて１００本だして１本通ればいい方みたいよ」

内田「そうですよ。私なんかもう１０年書いていますけど、いまだ入選なしですよ。あはっはっ」

大友「そうですよ。批評はみんな好き勝手言いますからね。どのシナリオも突っ込みどころ満載ですよ。僕達に出来る事は、何言われても自分を信じて書き上げるしかないんですよ」

和代「大友君がそれ言うかね」

鈴木「みんなありがとうございます。あまり一喜一憂しないで、頑張って必ず書き上げます」

鈴木が力なく笑う。

和代「そうよ。まずは書き上げて応募しないと」

内田「では締め切りも近いので今日はこの辺でお開きにしますか」

鈴木、大友、和代、内田が、各々珈琲を飲み干す。

２４○　鈴木家・リビング内（朝）

鈴木、景子、杏里、英治が食卓で食事をしている。

杏里「お父さん、その後シナリオの創作活動はどうなの？」

鈴木がぼうっとして食事が進んでいない。

鈴木「う、うん、ぼちぼちかな」

景子が食べながら鈴木を見る。

杏里「あれ、何かテンション低くない？　スランプかな」

鈴木「そんなことないよ」

英治「才能ないのに気がついたじゃないの？」

鈴木がうつむく。

景子「英治、言葉を慎みなさい」

英治「はーい。あっもう時間だ。会社行かないと」

英治が立ち上がり出て行く。

杏里「あっ、まってよ。私も駅まで一緒に行く」

杏里も立ち上がり後を追う。

景子と鈴木は静かに食事をしている。

景子「お父さん、たまには散歩行きません？」

鈴木「えっ？」

景子「だって退職してからは、シナリオを書いているか、スクールに行っているだけじゃないですか。たまには気晴らしで行きましょうよ。ね、いつも休みの日には行っていたでしょう」

景子が鈴木を見る。鈴木笑みを浮かべ、

鈴木「そうだね、たまにはいいよね」

２５○　公園

青空、色ずく木々の葉が風で揺れている。

鈴木と景子が２人歩いている。

すれ違う人達、鈴木の服装に振り返る。

鈴木気まずそうに景子を見る。
景子が鈴木を見て笑う。
鈴木がベンチを指して景子と座る。
鈴木「なんか気持ちいいね」
景子「本当ですね。１番良い季節ですものね」
鈴木「なんか２人の時間作れなくってごめん」
景子「別にいいですよ。私は私で楽しくやっていますから」
鈴木「お母さんは強いね」
景子「お父さんが弱すぎるんですよ」
鈴木「えっ」
景子「情けない」
鈴木「えっ、えっ」
景子「あれだけエラそうに啖呵を切ってから３か月経ちましたが、今の体たらくは何ですか！　情けない。お父さんは今までの自分を捨てたんですよね。だからいい年をしてこんな格好をしているんですよね！　うわべだけ変えても中身が伴っていなければ意味がないじゃないですか！」
鈴木「ご、ごめん」
景子「お父さんには、私がいるし、経済的に独立した子供も２人います。多少の貯えもありますからあと１、２年は何とかなります。これで何か悩んでいる意味ありますか？　やるべき事を６０歳までやり切ったんですよ。お父さんはもう双六で言えば１回上がっているんです。もっと大胆に生きてくださいよ。６０歳過ぎて才能があるとか、ないとかそんな事関係ないじゃないですか！　下を向いていたら、空から落ちて来る何かを受け取れませんよ」
景子、手を出して空を見上げる。
鈴木も青い空を見上げる。

鈴木「空ってこんなに綺麗で青かったんだね」
景子「お父さんは残りの人生をかけて、目に見えない何かを伝えていくんでしょう。自分にできる何かを探して、自分だけの物語を作って、そこに行くんでしょう。だったらお父さんは上を向いて歩かなきゃだめです。「上を向いて歩こう」です」
鈴木「お母さん……」
景子「九ちゃんですよ」
鈴木「はい、九ちゃんになります」
空、飛行機が飛んだ後にひこうき雲が出来ている。
鈴木「お母さん、今回妥協してコンクールに出そうと思ったけど、やっぱり別のシナリオで行ってみるよ」
景子「締め切りは間に合うの？」
鈴木「うん、何とか間に合わす。絶対に」
景子「頑張ってくださいね。夜食におにぎり作りますから」

２６○　鈴木家・書斎内（夜）

窓の外、夜空に月が見える。
鈴木がＰＣに入力をしている。
景子が扉を開けておにぎりを脇の棚に置いている。
×　　×　　×
窓から日差しが入ってくる。
鈴木がＰＣに入力をしている。
×　　×　　×
窓から夕日が入ってくる。
鈴木がＰＣに入力をしている。

２７○　鈴木家・書斎（夜）

鈴木がＰＣ画面の原稿をじっと見ている。

×　　×　　×

鈴木がＰＣ画面のＮテレシナリオライターコンテスト「エントリーフォーム」入力をしている。

鈴木「確認ボタンを押してください」ボタン押す。

鈴木「いけっ！」

原稿が送信される。

鈴木「送れた！　間に合った。良かった！」

鈴木が日付と時間を見ると、２０２３年１０月３１日２３時５９分になっている。

鈴木がほっとして机に倒れこむ。

×　　×　　×

窓から群青の空が見える。

鈴木が机に伏せて寝ている。

景子が鈴木に毛布をかけている。

景子がＰＣ画面を見る。

景子が窓の外を見てカーテンを閉める。

２８○　ＰＣ画面

タイトル「さあ、パンクでロックなシナリオで行くぜ！」最終稿

ＰＳ　まだ、なにものでもないあなたにささげる。

脚本　鈴木・パンク・太郎

２９○　高層ビル・事務所内（夕）

Ｔ・２０２２年７月

３０人程度がＰＣ入力したり電話をしている。

鈴木は工藤の机の前で立っている。

工藤「鈴木君、このままだと困るんだよね。定年前だからって適

当に仕事しているんじゃないですか？」
鈴木「そんな事はないですよ」
工藤が見下したような感じで、
工藤「まあ、いいですけどね。ただ定年後もうちで働く気なら、もうひと踏ん張りしてもらわないと継続厳しいと思いますよ」
鈴木「あと1週間ありますので、目標にいくように頑張ります」
工藤「はいはい、言うのはタダですからね。それでは1週間後に結果報告お願いしますね」
鈴木がお辞儀をして自分の席に戻る。
隣の席の横川が耳元で、
横川「失礼な奴ですね。あんな言い方はないですよ。鈴木さん気にしない方が良いですよ。ドンマイ、マイマイですよ」
鈴木、ＰＣに入力している。

３０〇　繁華街・居酒屋・店内（夜）

鈴木、渡辺、山田、横川、千尋がジョッキを持って、みんなで乾杯をする。
渡辺「鈴木さん今日は飲みましょう！」
横川「そうですよ。工藤課長最低ですよ」
千尋「わたしも聞いていたけどあれはないわ。私だったら気持ち折れて帰っているわ」
山田「いやいや、佐藤さんはそんなキャラではないですよ。倍返しで工藤さんを論破していますよ」
千尋「確かに、私なら倍返しで泣かすわね！」
渡辺「鈴木さん、でも安心してくださいよ。工藤課長来年異動の噂がありますよ」
千尋「そうなんだ、その話が本当だったら良いけど」
横川「て、ことは渡辺さんが課長に昇進じゃないですか？」

渡辺嬉しそうに、

渡辺「まあ、その可能性はなくはないな」

山田「その渡辺さんの後釜は横川さんですか？」

横川も嬉しそうにお酒を飲む。

横川「そうだよな。俺しかいないよな」

千尋「これってウィンウィンで良いじゃない？　渡辺係長、いや渡辺課長！　それなら私も正社員にしてよ！」

鈴木以外、全員で大笑いをする。

渡辺が鈴木を見て、

渡辺「鈴木さんは６０歳過ぎてもうちで働くんですよね？」

鈴木「うーん、今考えているところ」

千尋「えっ？　定年退職も考えているの？」

横川「だめですよ。あんなことで短気起こしちゃあ。６０歳過ぎて再就職なんて絶対に無理ですからね。組織人として６５歳まではがんばりましょうよ」

鈴木「みんな心配してくれてありがとう。うれしいよ」

鈴木がみんなを見る。

３１○　シナリオセンター・会議室内

鈴木と香織が向き合っている。

高橋が鈴木のシナリオを見ている。

香織「先週ご提出いただいたシナリオクリニックですが」

鈴木「はい、初めて１時間物を作りました。どうでしょうか？」

香織「そうですね。書き上げた事は素晴らしいのですが、ちなみにこの作品はどのように作られましたか？」

鈴木「はい。先生の講座を１年受講して教わったやり方で、まず３行のストーリーを考えて、それから登場人物のキャラクターを決めて、全体ストーリーの序破急を考えてからプロット

を４枚程度にまとめて、シナリオを作成していきました」
香織「基本に忠実で良いですね。でもあまり決めつけずに、ご本人のスタイルを時間かけて確立していく事も重要ですよ。それではこの話を簡潔に説明してもらえますか？」
鈴木「あ、はい、どろどろの愛憎劇になります。全く環境の違う、自分の居場所を見失っていた１８歳の２人の男女が、場末の路地裏でわずか１０分だけ出会い、話もせずに別れます。しかし２人はその一瞬見つめ合っただけで繋がってしまいます。そんな２人が１２年後再会しますが、すでに女は何処にも逃げ場がなく行き詰っています。それでも男は全てを捨てて、ここで落ちていく事を望んで、２人で滅びていく話です」
香織「魅力的な話ですよね」
鈴木「ありがとうございます。私も一緒に滅びそうで怖いです」
香織「でもまだシナリオの技術が伴っていないのでシナリオが滅びています。大きな修正点はト書きに余計なところが多いのと、セリフがところどころ文章になっています。ただ粗削りですけど可能性のあるシナリオなのでしっかり推敲して完成させてくださいね」
鈴木「ありがとうございます。がんばります！」
香織「シナリオライターを目指している方のほとんどが仕事をしながら、限られた時間で頑張って書いています。ですから仕事以外の日常を削らないとできない作業です。しかしデビューできた人はそこを乗り越えてたどり着いています。鈴木さんも頑張ってそこに行ってください。応援していますよ」
鈴木「はい、残りの人生、物語に殉ずる覚悟で精進していきます」
香織「鈴木さん、そこまでは大丈夫ですよ」

３２〇　繁華街・国道沿いの道

鈴木が全力で走っている。
道行く人達が振り返る。

３３○　鈴木家・リビング内（夜）

景子がソファに座ってテレビを見ている。
扉が開いて、息を切らせて鈴木が入ってくる。
景子が驚いて振り返る。

鈴木「お母さん！　ただいま！」
景子「おかえりなさい。どうしたんですか息を切らせて」
鈴木「大事な話があるから聞いてくれるかな」
景子「なんですかいきなり」

×　×　×

鈴木と景子が食卓で向き合って座っている。
テレビからは「Ｑ１０」が流れている。

景子「なんですか、かしこまって」
鈴木「僕、来年６０歳で定年退職したいけどいいかな？」
景子「どうしたんですか、会社で何かあったんですか？」
鈴木「いや、今シナリオスクールに通っているだろ」
景子「老後の趣味でやろうとしているやつですよね」
鈴木「そう、会社を６５歳でやめてから出来るって始めたやつ」
景子「それが？」
鈴木「６０歳からそれを専任でやりたい」
景子「え？　会社を辞めてですか？」
鈴木「うん、もちろんアルバイトとかはするけど」
景子「アルバイトするならやめる必要ないじゃないですか」
鈴木「やっぱり正社員だと、求められる会社のミッションが違うんだよ。多分そうすると今までの生活スタイル変わらないし」
景子がお茶を一口すすり鈴木を見ている。

鈴木「前からずっと迷っていたんだ。どうかな？」
景子「お父さんがやりたいなら。別に良いですけど。その代わり私パートのシフト増やしますから家事手伝ってくださいね」
鈴木「本当？　もちろん家事もするよ。やった！」
鈴木が立ち上がり小さくガッツポーズ。
景子「大げさですね。定年までがんばって働いたんだから、あとは好きな事してください」
鈴木「頑張ってあと1年は働くからね、本当にありがとう！　それじゃ、これから課題があるから取り掛かるね」
鈴木が踊りながら部屋から出て行く。
景子が笑みを浮かべてお茶をお飲む。
テレビ画面では「Ｑ１０」が流れている。

３４○　鈴木家・リビング内（朝）
窓から日差しが入る。庭のヒマワリが萎れている。
鈴木、杏里、英治、景子が食卓で食事をしている。
英治、杏里、鈴木が慌ただしく席を立ち、リビングを出て会社に向かっていく。
景子、後かたずけをしている。
景子片付いた食卓でお茶を飲んでいる。

３５○　高層ビル群・オフィス街
鈴木と横川が笑いながら言い合っている。
街路樹の銀杏並木が黄色く色づいている。

３６○　繁華街・居酒屋前・外（夜）
鈴木、渡辺、横川、山田、千尋が騒いでいる。
道路の街路樹の銀杏並木の落ち葉が舞っている。

鈴木が白い息を吐いて月を見上げる。

３７○　鈴木家・書斎内（夜）

鈴木ＰＣに向かってシナリオを打っている。

鈴木が窓の外を見ると、粉雪が降っている。

３８○　繁華街・国道沿い・外（夜）

鈴木、和代、大友、内田が国道沿いを歩いている

と桜並木の桜が咲いている。

鈴木が立ち止まり桜が散るのを見ている。

３９○　シナリオスクール・教室内

受講生が２０名程席についている。

香織が教壇で講義をしている。

鈴木の前後の席に和代、大友、内田が座っている。

鈴木が振り返り、窓の外のあじさいを見る。

４０○　鈴木家・リビング（朝）

窓から日差しが入る。庭のヒマワリが咲いている。

鈴木、杏里、英治、景子が食卓で食事をしている。

鈴木が箸を止めて、

鈴木「英治、杏里いいかな」

英治と杏里が箸を止めて鈴木を見る。

英治「なに、改まって」

杏里「朝の忙しい時になに？」

鈴木「実は今日なんだけど早く帰って来られるかな？」

英治「来られるって、親父今日で定年だから家族でお祝いするん

だろ。普通に早く帰って来るよ。な、杏里」

杏里「そうよ、お母さんとすでに段取りしてあるわよ」
鈴木「そうだったんだ。ごめん。ならいいや」
杏里「何か別に話があるんだ」
英治と杏里立ち上がる。
杏里「ごめん、今日は早帰りだから、早出にしているの。悪いけど行くね。じゃ夜、楽しみにしていて！」
英治「俺も行くから、親父、話は夜聞かせて。杏里、待てよ！」
英治と杏里出て行く。
鈴木と景子笑みを浮かべて食事をしている。
景子「今日で最後ですね。長い間お疲れ様でした」
鈴木「うん、ありがとう、それじゃ行ってくるよ」
鈴木が立ち上がり出て行く。
窓の外からセミの鳴き声が聞こえる。
景子が笑みを浮かべて窓の外を見る。

４１〇　高層ビル群・事務所内（朝）

社員達が疎らに座っている。
鈴木が辺りを見ながら席に座る。
隣の席の横川が寄って来て、
横川「おはようございます。寂しいですね、今日で最後なんて」
鈴木「おはよう、今日もよろしくね」
横川「もちろんですよ、こちらこそよろしくです」
渡辺、山田、千尋も近づいて来て、
渡辺、山田、千尋「おはようございます」
鈴木が驚いて振り向く
鈴木「お、おはよう、今日もよろしくお願いします」
渡辺、山田、千尋「こちらこそ、よろしくです」
全員が笑みを浮かべる。

４２○　高層ビル・事務所内（夕）

３０人程の人達が集まっているその中心に鈴木が花束を持ってお辞儀をしている。

工藤、千尋、渡辺、山田佑、横川と周りの社員達が拍手をしている。

渡辺、千尋、山田、横川が鈴木を見ている。

４３○　高層ビル・エントランス外（夕）

鈴木がビルを出たところで花束を空に高く投げる。

４４○　鈴木家・書斎内（朝）

Ｔ・２０２３年１１月１日

カーテンの隙間から日差しが入って来る。

鈴木が机に伏せて、毛布をかけて寝ている。

鈴木日差しが目に入り、驚いて目覚める。

ＰＣの画面はＮテレの送信後の画面になってる。

鈴木「あっ、応募した後、そのまま寝ちゃったんだ」

鈴木が立ち上がり、カーテンを開け両手を伸ばす。

４５○　鈴木家・リビング内（朝）

景子、英治、杏里が食卓で食事をしている。

鈴木が普通の服装で入って来る。

みんな驚いて鈴木を見る。

英治「つ、ついに正気に戻ったね」

鈴木「僕はいつも正気だよ、でも、お陰様で１周回って来たよ」

杏里「意味が分からないけど」

英治「とうとうシナリオ諦めたんだね」

鈴木「何言っているんだよ、諦める訳ないだろ。パンクでロック

は、ここにあるってやっとわかったから」

鈴木が胸を小さく叩いて、

鈴木「それじゃ、今日は図書館に寄るから早く出るね！」

景子「行ってらっしゃい」

鈴木が出て行く。

英治と杏里と景子が閉まった扉を見ている。

英治「なんか親父感じ変わったね」

杏里「なんか悟りを開いたような感じ？」

景子「人生の悟りはそんなに甘いものじゃないですよ。また1か月もしたらいつもの煮え切らないお父さんに戻りますよ」

英治「流石、親父の事よくわかっているよね」

3人が笑っている。

46〇　繁華街・国道沿い

鈴木が早歩きで歩いている。

47〇　シナリオスクール・教室内

様々な受講生が15名程席についている。

鈴木も席についている。

和代、大友、内田が鈴木の前後の席に座っている。

和代「鈴木さん、大丈夫？　Nテレ出せたの？」

鈴木「うん、なんとかぎりぎり間に合った」

内田「先週講座に来ないから心配していたんだ？」

大友「でも良かったです。みんなが出せて」

鈴木「1から作り直したから、1週間籠って書きました」

和代「へぇ、思い切ったね。でも鈴木さん、頑張ったんだね」

鈴木「あれ、何か今日、教室の人数少ないですね」

和代が鈴木に近づき耳元で小声で話す、

和代「入賞した川口さんと室井さんは、シナリオの仕事が入りだしたから無事卒業して、プロのスタートラインに立ったの」
鈴木「お2人のシナリオ面白かったですもんね。でもすごいな」
和代が苦笑いで鈴木を見て、
和代「鈴木さん本当にお人よしね。それで、近藤さんは夢諦めて帰省、平田さんは就職活動、村橋さんも仕事との両立が難しくて、3人は退校したの。それで5人がいなくなりました。以上、共有になります」
鈴木「そうなんですね。やはり厳しい世界ですね。僕もまた身が引き締まります。情報共有ありがとうございます」
大友と内田が、笑みを浮かべ鈴木を見る。
香織と北村佳祐（35）が教室に入ってくる。
内田が鈴木に話しかけて、
内田「今日は特別講座、先週いなかったから聞いていないよね」
大友「N局の敏腕プロデューサーが最前線の話を聞かせてくれて、なおかつ、現場の模擬会議をやってくれるみたいですよ」
鈴木「す、すごいじゃないですか。楽しみですね」
大友「鈴木さん大丈夫ですか……」
香織と北村が教壇に立つ。鈴木が2人を見ている。
香織「今日は先週お話しした通り、N局の北村さんにお出でいただき、現場ではどのように作品作りが行われているのかを、みなさんにお聞かせする事ができる運びになりました。みなさんいい経験になると思いますので、積極的に質問をしてデビューに向けての参考にしてくださいね。それでは北村さんお願いします」
受講生達が緊張の面持ちで北村を見ている。
×　×　×
机の配置が変わり、3～4名が4チームに分かれ

て座っている。

北村「みなさんはすでにシナリオの基礎を学んでいただいている方々だと思いますので、今日は作品を作る時の会議を想定して、みなさんにもその設定で参加してもらいたいと思います」

みんな驚いて教室がざわざわしている。

北村「それではお題ですが、来年4月からの番組改編に伴い、日曜日10時枠で新作オリジナルドラマを制作したいと思います。皆さんだったらどんなドラマを作りたいかをグループごとにまとめて1本ずつ発表して下さい。時間は30分差し上げます。それではグループ討議をお願いいたします。なお、テーマ、予算は無視して面白いと思ったアイデアを出してください！　はい、それではスタートです！」

グループごとにアイデアを出し合っている。

各グループホワイトボードに書き込んでいる。

北村と香織が1番前の席に座って全体を見ている。

北村「みんな結構本気でやっていますね」

香織「それはそうですよ」

北村「多分ここではそんなに面白いアイデアは出てこないと思いますが、この短い時間で誰がリーダーシップをとっているか、対話が出来ている人か、傾聴ができている人か、周りが見えている人かを見て、最後はチームプレーで仕事が出来る人かを見極めたいですね」

香織「私はあそこの大友君に注目してほしいですね」

北村「香織先生の推薦ですね。あとは発表者の発表の仕方で、適性があるか見ていきましょうか」

香織「そうですよね。1人でできる、みんなで出来るの、両方を持っていないと番組制作でシナリオは作れないですものね」

大友が揉めているグループをまとめている。

和代のグループは笑いながら話し合っている。
鈴木は議論を交わしたグループの中で黙っている。
内田は静かなグループでぼそぼそ喋っている。
北村「はーい、それでは時間です。これからグループごとにリーダーが前に出て１つのアイデアを発表してください」
グループごとに誰が話すかを話している。

４８〇　喫茶店・店内（夕）
和代、大友、内田、鈴木が座っている。
和代「いや、今日面白かったね。久々に血が騒いだわ」
内田「本当だよ、けっこう前のめりでいっちゃったよ」
鈴木「僕、みなさんに圧倒されて発言あまりできませんでした」
和代「鈴木さん、固まり過ぎよ」
大友「でも、北村プロデューサー流石だよね。言葉の１つ１つが刺さりすぎて血塗れで、全治３か月ですよ」
和代「ほんとよね。でも大友君のアイデア良かったんじゃない？」
内田「そうだよクラスで唯一褒められていたよね」
大友「実はここだけの話ですけど、北村さんから密かに来週Ｎ局の会議に来てくれって言われたんです」
和代、内田、鈴木が驚いている。
大友「何か面白そうだからって言われて、嬉しかったですけど、何か怖くて、えへへっ」
内田「よ、良かったじゃない。チャンスだからがんばりなよ」
和代「そ、そうよ、大友君確かにセンスあって面白いもの」
大友「すいませんが、このあと高橋先生に今後の対策で呼ばれていて戻らないといけないんです。だからちょっと行きますね」
和代「ああ、そうなんだ。がんばってね」
大友、立ち上がり店から出て行く。

鈴木、内田、和代、珈琲を飲んでいる。
内田「俺も続けていくのそろそろ限界かな」
和代「そんな事言わないで、こんな事よくある事じゃない」
内田「そうだけど最近ずっと考えていたんだ。もう限界かなって」
鈴木「だめですよ。そんな弱気じゃ。頑張って書き続けましょう」
内田「鈴木さんは生活に余裕があるからそんな事言えるんだよ」
鈴木がうつむく。
和代「内田さん、鈴木さんにあたるのやめなさいよ」
鈴木「僕は大丈夫ですよ」
和代と内田がお互いを見ている。
和代「もう、今日は一旦お開きにしよう」
内田「そうだね。行こうか」
鈴木「はい、また来週お願いします」
内田、和代が無言で立ち上がる。
鈴木も後をついて店を出て行く。

４９〇　繁華街・国道沿い（夕）
鈴木が１人歩いている。
鈴木が歩きながら、夕暮れの空を見上げる。
鈴木がスマホを出して景子にラインを送る。
スマホ画面「今日は晩御飯なんですか？（鈴木）」
スマホ画面「混ぜご飯、サンマの塩焼き、肉じゃが（景子）」
スマホ画面「やった！　大好物。これから帰ります（鈴木）」
スマホ画面「今日もお疲れ様でした（景子）」
鈴木がスマホを仕舞い、ゆっくり歩き出す。
空は夕暮れが沈もうとしている。

《完》